

使徒の働き2章14-47節 「ペテロの福音説教」

1A 聖書からの説教 14-36

1B 聖霊傾注 14-21

2B 十字架 22-23

3B 復活 24-32

4B 着座 33-36

2A 民の応答 37-47

1B 悔い改め 37-41

2B 教会の始まり 42-47

本文

使徒の働き2章を開いてください、午前礼拝で2章の前半部分、1-13節まで見てきました。今から後半、14節から47節まで見ていきます。五旬節の日に、イエス様が約束してくださったように、聖霊が彼らの上に臨まれました。ローマの世界各地から祭りを守るために来ていた、ユダヤ人たちがその時の音を聞き、やってくると、なんと弟子たちが、自分たちの住んでいる言葉で神をほめたたえていました。驚き、当惑していましたが、ある人が「ぶどう酒に酔っているのだ」と嘲りました。そこでペテロが、その言葉を使って彼らに福音を語ります。そして、その福音説教によって、ユダヤ人の成年男子三千人がバプテスマを受けます。教会が誕生するのです。

1A 聖書からの説教 14-36

1B 聖霊傾注 14-21

¹⁴ ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々に語りかけた。「ユダヤの皆さん、ならびにエルサレムに住むすべての皆さん、あなたがたにこのことを知っていただきたい。私のことばに耳を傾けていただきたい。

ペテロが立ち上がります。けれども十一人も共に立っています。これから、イエスがよみがえったのだという復活の事実を証言することになるからです。彼らこそが、バプテスマのヨハネの時からイエス様と共にいて、復活を目撃した者たちだったからです。覚えていますか、十一人しかいなかったのですが、くじによってマッティアが選ばれました。彼も目撃していました、そして今、共に立ち上がっています。「声を張り上げ」ていますが、音響設備があるわけではありませんから、人々に聞こえるように今、声を張り上げています。

そして、呼びかけていますが、「ユダヤの皆さん」というのは、ユダヤ地方の人々、すぐそばに住んでいる人々です。そして、「エルサレムに住むすべての皆さん」というのは、今、世界中から祭り

を守るためにエルサレムに訪れ、滞在している全ての人々ということです。そして、今、起こっている、それぞれの言語で弟子たちが神を賛美している、この驚くべき現象について一体何のことか、彼らは知りたがっていたので、「私のことばに耳を傾けていただきたい。」とっています。

¹⁵ 今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが思っているように酔っているのではありません。

これはユダヤ人の習慣を背景としています。ユダヤ人はぶどう酒を飲みますが、夕刻になってから飲みます。第三時、朝の九時はユダヤ人にとって日に三度の祈りを献げる最初の時間となります。宮に上って祈るので、ここは神殿の敷地であることがわかります。ですから、ここで酒に酔っているということは、あり得ないとして否定しています。

¹⁶ これは、預言者ヨエルによって語られたことです。

ペテロは、彼らが「2:12 いったい、これはどうしたことか」と言い合っていたので、「こうしたことです」と明確に答えました。彼の説教は、人々の素朴な疑問にそのまま答えるものでした。そして、それは聖書に基づくものです。みことばの確証としてのしるしです。マルコの福音書の最後は、「16:20 主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしをもつて、確かなものとされた。」とあります。ペテロも他の使徒も、聖書こそが最終的な権威であり、私たちの生活と実践の基であるという立場を保持していました。「このように神に語られたのだ」、「このようなしがあつたのだ、だからこれは本当なのだ」としたら、私たちの信じる基は、そうした体験や気持ちになってしまい、信仰はどこか分からないところに彷徨い出ます。

¹⁷ 『神は言われる。終わりの日に、わたしは すべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。¹⁸ その日わたしは、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると彼らは預言する。¹⁹ また、わたしは上は天に不思議を、下は地にしるしを現れさせる。それは血と火と立ち上る煙。²⁰ 主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽は闇に、月は血に変わる。²¹ しかし、主の御名を呼び求める者は みな救われる。』

先週、聖霊のバプテスマについての特徴を話しました。それは、「すべての人にわたしの霊を注ぐ」というものです。旧約時代においては、モーセやダビデなど、神の選ばれた特定の人々に御霊が注がれていました。しかし今や、主イエスを信じる者たち全てに聖霊の約束が与えられています。

そして、ここで大事なのは、御霊が注がれる時の背景です。「終わりの日に」とあります。そして読み進めると、19 節以降、大患難についての預言になっています。神が地上に御怒りを終わりの日に注がれる時で、天変地異が起こり、それで「主の大いなる輝かしい日」、主の再臨がやってくる

ます。それまでの間に、主の御名を呼び求めればその人は救われるという約束です。

つまり使徒ペテロは、今が終わりの日だと信じてはばかりませんでした。間もなく主が来られると信じていました。前回、弟子たちが、「1:6 イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」と尋ねたら、イエス様は、「1:7 いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るどころではありません。」と答えられました。それをもって、「終わりの日というのは、はるか向こうのことであって、教会が考えるものではない」といったら誤りなのです。ヘブル書には「1:2 この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。」とあります。キリストが地上に来られてから、すでに終わりの時なのです。神の国が力を持って到来しており、御霊によって今は不法の秘密が抑えられていて、そして取り除かれた時に、不法の人、反キリストが現れます。しかし、まことの救い主、キリストが再び戻って来られて、不法の人を滅ぼすのです。こうした切迫した、緊急事態の時に私たちは生きているのだということについては、使徒の時代も今も変わらないのです。

そして、聖霊の賜物が終わりの日まで、主が再臨される時まで続いていることを知るのは大事です。なぜなら、なぜか教会が、もうこうした聖霊の働きは必要なくなったとする考えが、入り込んでいるからです。超自然的な聖霊の著しい働きを強調するあまり、行き過ぎがあつて、それに対抗して、「聖書が編纂された後、正典が完成してからは必要なくなった」とする考えが出てきました。異言も預言は、神学校において聖書教育があるし、宣教師は語学学校で学べるし、病気は病院がある。一時的にそうした超自然的な働きがあるのだとするのです。教会の制度化が始まりました。しかし、聖書によれば、聖霊の賜物は主の再臨の時まで続くのです。

2B 十字架 22-23

²² イスラエルの皆さん、これらのことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行い、それによって、あなたがたにこの方を証しされました。それは、あなたがた自身をご承知のことです。

ペテロは、聖霊が注がれたしるしであることを説明した後で、真っ直ぐにイエス・キリストの福音を宣べ伝えます。主は弟子たちに、「ヨハ 16:14 御霊はわたしの栄光を現されます。」と言われました。ペテロは聖霊に満たされて、主イエスを宣べ伝えたのです。

彼の語る福音は、第一に、「ナザレ人イエス」でありました。イエスという名は、ユダヤ人の中で数多くありました。ですから、どこのイエスなのかを特定しなければいけなかったのです。イエスという名は、「ヤハウエは救い」という意味です。ナザレ出身のイエスコそが、あなたがたを罪から救うのだということです。

そして福音の第二は、イエスが神からの方だと証しされたということです。「あなたがたの間で力

あるわざと不思議としるしを行い」とあります。ユダヤ人の指導者で、パリサイ派であったニコデモは素直に答えました。「ヨハ 3:2 あなたがなさっているこのようなしるしは、神がともにおられなければ、だれも行うことができません。」その力あるわざと不思議によって、この方が神からの方であり、神ご自身が人として現れたことを証しているものでした。

²³ 神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。

ペテロの語った福音は、第三に「十字架」でありました。ペテロは明確に、キリストの十字架を、「神が定めた計画と神の予知によって」のものであることを伝えています。主が、復活されてから、弟子たちに、聖書を解き明かしてこのことを明らかにされました。「ルカ 24:44 わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」神が、はるか昔からキリストが私たちの罪のために苦しみを受けることをお定めになっておられて、そのことを知って世に遣わされました。

しかし、ペテロは彼らの罪を、はっきりとそのまま明らかにします。「あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺した」と言っています。神のご計画の中にありましたが、彼らのしたことは罪であることに代わりません。律法を持たない人々とは、ローマ総督ピラトのことです。それを行ったのはユダヤ人指導者ですが、しかし過越の祭りの時に、イエス様が十字架に付けられたことは、世界中から集まって来た離散のユダヤ人にも見ていたのです。「ヨハ 19:20 イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。」なので、ここに集っているユダヤ人もその罪を共有できます。そして、全人類の罪のためにキリストが死なれるように神は意図されました。映画「パッション」の監督である、メル・ギブソンは、「ここは出演する」といって、映画の中の場面にわざわざ出てきました。それは、ローマ兵がイエス様の手に釘を打ち付ける場面です。その手はメル・ギブソンの手だったのです。自分自身が、イエス様を十字架に付けたのだということです。

3B 復活 24-32

²⁴ しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。

ペテロの語る福音は、第五に「復活」に入ります。ここが彼の説教の中心です。使徒の働きについてその後のペテロの説教も、また後半部分のパウロの説教でも、すべてが、「神がイエスを死者の中からよみがえらせた」ということが中心になっています。パウロはコリント第一 15 章で、「そして、キリストがよみがえられなかったとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しい

ものとなります。(14 節)」と言いました。

でペテロは、ここで「死の痛み」と言っていますが、直訳は「陣痛」です。産みの痛みなのです。かつてイエス様が、ご自身のよみがえりをそのように弟子たちに表現しましたね。「ヨハ 16:21-22 女は子を産むとき、苦しみます。自分の時が来たからです。しかし、子を産んでしまうと、一人の人が世に生まれた喜びのために、その激しい痛みをもう覚えていません。あなたがたも今は悲しんでいます。しかし、わたしは再びあなたがたに会います。そして、あなたがたの心は喜びに満たされます。その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。」ペテロが強調しているのは、女が子を産むのを妨げることはできない、その束縛の中に子を置き続けることはできない、出産するのは時間の問題だという意味合いです。死というものに、メシアであり、神からの方を抑えていることはできないのだ、ということです。

ダニエルが、獅子の穴に投げ込まれましたが、次の日の朝、王が見に行くと、確かに生きていました。その時のダニエルの言葉が、イエス様の復活に相通じるものがあります。「ダニ 6:22 私の神が御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の危害も加えませんでした。それは、神の前に私が潔白であることが認められたからです。王よ、あなたに対しても、私は何も悪いことはしていません。」ダニエルは神の前に潔白であることが認められたから、死から救われたのだと言っています。そんな罰には値しないのです。イエス様は罪なき方であり、神の子キリストであることが、よみがえりにより明らかにされたのです。義なる方は永遠に生き、死によって束縛はできないということです。

²⁵ ダビデは、この方について次のように言っています。『私はいつも、主を前にしています。主が私の右におられるので、私は揺るがされることはありません。²⁶ それゆえ、私の心は喜び、私の舌は喜びにあふれます。私の身も、望みの中に住みます。²⁷ あなたは、私のたましいをよみに捨て置かず、あなたにある敬虔な者に 滅びをお見せにならないからです。²⁸ あなたは私に いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前で、私を喜びで満たしてください。』

これは、詩篇 16 篇からの箇所です。ペテロはこれから、この箇所を解き明かします。講解説教をします。ダビデが紀元前 1000 年頃に歌ったものです。しかし、詩篇の数多くの箇所と同じように、聖霊によって導かれたダビデは預言をしていました。

²⁹ 兄弟たち。父祖ダビデについては、あなたがたに確信をもって言うことができます。彼は死んで葬られ、その墓は今日に至るまで私たちの間にあります。

今、おそらくペテロは神殿の敷地から、大勢のユダヤ人の巡礼者に語っています。神殿の丘はモリヤ山の上にあります。その南にはシオンの山があり、そこが元祖エルサレムです。ダビデの

町と呼ばれたところです。ダビデはこの町のどこかに、王の墓の中に葬られました(Ⅱ列王 2:10)。ですから、明確に誰の目にも、ダビデがよみがえっていないことは明らかです。聖書本文を見てください。「あなたは、私のたましいをよみに捨て置かず、あなたにある敬虔な者に 滅びをお見せにならないからです。」とあります。陰府とは、死者の行く所として出てきます。ギリシア語では「ハデス」です。死の中に留まっていることは明らかだ、ということです。

³⁰ 彼は預言者でしたから、自分の子孫の一人を自分の王座に就かせると、神が誓われたことを知っていました。³¹ それで、後のことを予見し、キリストの復活について、『彼はよみに捨て置かれず、そのからだは朽ちて滅びることがない』と語ったのです。

ダビデは、自分の世継ぎの子がキリストとなり、永遠の御国の王となることを知っていました。「Ⅱサム 7:12-13 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」そこで、自分から出てくる子、その子孫キリストを預言する時に、一人称の「私」という言葉を使って、キリストの復活を語ったということです。この方は、朽ちない体で復活することを予見していたのです。

「あなたにある敬虔な者」とありますが、「あなたの聖なる方」とも訳せます。この方は、聖なる方であり、罪を犯されませんでした。十字架刑に処せられましたが、あらゆる人が、総督ピラトも、そして裏切ったユダマデが「罪を犯していない」と証言しました。その方が、罪から来る報酬である死の中に留まるはずはない、滅びるはずはないということです。

³² このイエスを、神はよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。

ここでペテロは、他の十一人と共に、なぜここにいるのかを述べています。そのイエスの復活を目撃した証人たちなのだ、ということです。

4B 着座 33-36

³³ ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。

ペテロの語る福音の、第六は「神の右の着座」です。前回の学びでお話したように、イエス様は死んでよみがえって、そして父のところに戻ることを強く願っていました。「ヨハ 17:5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。」そして大祭司カヤパの前で、こう言われました。「マル 14:62 あなたがたは、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」これは、ダニエル 7 章に

ある預言です。主はしもべとして地上を歩まれていました。十字架の死に至るまで忠実でした。それゆえ、父なる神はキリストをよみがえらせ、そしてあらゆる名にまさる名を与え、すべての主権、力、権威の上にご自分の子を置かれました。ペテロが第一の手紙でこう言っています。「3:22 イエス・キリストは天に上り、神の右におられます。御使いたちも、もろもろの権威と権力も、この方に服従しているのです。」それが、「神の右の座に着く」ということです。

そして、第七は、「聖霊の注ぎ」であります。神学用語で「聖霊の傾注」と言います。父の御座の右に着いておられるので、そこで聖霊を受けて、主がご自分の父によって、弟子たちに注いでくださったのです。今、それぞれカ国の言葉で神をほめたたえているしるしは、聖霊が注がれたことなのだということです。このことも学びましたが、主が父のところに行ったからこそ、助け主が弟子たちに与えられるのです。「ヨハ 16:7 去って行かなければ、あなたがたのところへ助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところへ助け主を遣わします。」

³⁴ ダビデが天に上ったのではありません。彼自身こう言っています。『主は、私の主に言われた。あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。³⁵ わたしがあなたの敵を あなたの足台とするまで。』

ペテロは、神の右の座についておられることについて、他の詩篇の箇所を持ち出してきました。有名なメシアを預言する詩篇です。110 篇です。イエス様が、神殿にてユダヤ人指導者と議論をされた時に、「キリストはダビデの子なのに、ダビデがなぜ主と呼んでいるのか？」と問い質したけれども、返答がありませんでした。その時に主が引用されたのが詩篇 110 篇です。ペテロは明確に、ダビデ自身が、神の右の座に着いておられる方を主と呼んでいるのだから、彼自身のことではないと述べています。

ちなみに、35 節の「足台とするまで」とは主が再臨される時です。座っておられる主が、立つ時がきます。それは、主とキリストに敵対する王たち、その軍隊が集まった時で、ことごとく滅ぼし、制圧する時です。旧約の預言者が数多く預言し、詩篇 110 篇もその一つです。黙示録 14 章や 19 章の幻で明らかにされていることです。

³⁶ ですから、イスラエルの全家は、このことをはっきりと知らなければなりません。神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

ペテロは、ここで結論を出しています。ここまではっきりと、神はイエスが主でありキリストであることを明らかにされました。不思議やしるしによって、そしてご計画と予知によって、そして復活によって明らかにされました。そして、天から聖霊を降らせてくださったことも、今、自分たちの目の前で起こったのです。その主ともキリストともされた方を、あなたがたはこともあろうに、十字架につけ

て殺してしまったのだ、と断じています。「ヨハ 16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます。」聖霊に満たされたペテロは、今、はっきりと彼らの罪を明らかにしました。

2A 民の応答 37-47

1B 悔い改め 37-41

³⁷ 人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、私たちはどうしたらよいでしょうか」と言った。

彼らの心が刺されました。これが、福音の言葉、真理の言葉が伝わった瞬間です。これが、真理のことばが伝わる時の反応です。イエス様は、「あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、誰にも遠慮しない方だと知っております。」と言われたことがあります(マタイ 22:16)。神の真理のことばについて、ヘブル書ではこう書かれています。「4:12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」

ですから、福音の真理を語る者は、そのまま真っ直ぐに語るべきなのです。どうしても核心部分に入ると、そこを迂回して語ってしまう誘惑があります。しかし、パウロは若い牧者テモテに、しっかりと指導しました。「Ⅱテモ 2:15 あなたは務めにふさわしいと認められる人として、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神に献げるように最善を尽くしなさい。」そして、相手が受け入れようが、受け入れまいが、しっかりとこの務めを果たすことを命じられています。「Ⅱテモ 4:2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」ペテロがこのことを行ったからこそ、今、聞いていた人々が、「私たちはどうしたらよいでしょうか」と尋ねることができているのです。

³⁸ そこで、ペテロは彼らに言った。「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。

復活されたイエス様が弟子たちに前もって、「ルカ 24:47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」と言いつけておられました。罪の赦しのために必要なのは「悔い改め」です。バプテスマのヨハネの時から、その原則は変わっていません。ヨハネも、そして主ご自身も、「マル 1:15・・・神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」と言われていました。使徒たちも同じ使信を携えています。悔い改めは、文字どおりは「思い直す」ことです。単に悲しむだけではありません。あまりにも自分の犯した罪が悲しいので、もう二度と犯さないうという決意です。方向転換です。私たちが立つのは、聖なる神の前なのです。心からの悔い改

め、生ける神への立ち返りが必要です。

そして、イエスの御名によるバプテスマを受けます。これは、バプテスマを受けたら罪が赦される、救われるということではありません。イエスを主とし、この方につくバプテスマを受けるといことで、すでに自分の罪のためにこの方が十字架につけられ、三日目によみがえられたのだと心から信じて、告白していることです。それを行いによって人々の前で明らかにし、証人となってもらうことです。結婚の決意を結婚式にするのは、神の前で二人が結ばれたことを証人として立ってもらうためです。それと同じように、主の前での決意を人々の証人の前で明らかにします。「Ⅰペテ 3:21 この水はまた、今あなたがたをイエス・キリストの復活を通して救うバプテスマの型なのです。バプテスマは肉の汚れを取り除くものではありません。それはむしろ、健全な良心が神に対して行う誓約です。」

ここで大事なのは、「イエス・キリストの名によってバプテスマ」というところです。ユダヤ人にとって、水の中に浸ることは珍しいことでは全くありませんでした。ミクベと呼ばれる浸礼槽があり、全身、水に浸かることによって神殿の礼拝に臨みます。しかし、今、話しましたように、イエス・キリストという方に自分を一つにする、結ばれているということを表明しているのです。この方と共に十字架にかけられ、古い人は死に、墓に葬られます。水がその墓を表しています。そして、キリストがよみがえられたように、墓から出てきます。水から上がるのが墓から出てきたことを表します。そうして、キリストの新しい命を受けたのです。もう二度と、古き生活に戻らない。十字架を前にして生きていくと決意したのです。

そうすると、「賜物として聖霊を受けます」とあります。これは聖霊のバプテスマのことです。ここにいる人々はすべて、聖霊に満たされて他国の言葉で語っている弟子たちの姿を見ました。その聖霊を賜物として受けるということです。つまり、だれでも悔い改め福音を信じれば、聖霊が与えられるということでもあります。初めに戻るのです、すべての人が聖霊を受けることができるのです。

³⁹ この約束は、あなたがたに、あなたがたの子どもたちに、そして遠くにいるすべての人々に、すなわち、私たちの神である主が召される人ならだれにでも、与えられているのです。」

ここでペテロは、聖霊のバプテスマの約束の普遍性を語っています。ここにいる人々はもちろんのこと、彼らの子孫もそうだというのです。つまり、同じようにして悔い改め、イエスを自分のキリスト、救い主として信じる人々であります。さらには、遠くにいるすべて人ですから、異邦人も視野に入っています。ペテロ自身が後に、ローマの百人隊長コルネリウスの一家に聖霊が臨まれたのを見て、驚いていましたが、ユダヤ人ではない人々にも信仰によって心が清められ、聖霊を受けることができる、ということなのです。

ですから、先ほども話しましたように、「聖書の正典が完成してからは、聖霊のバプテスマのように著しい働きは必要でなくなった」というのは間違っています。コリント第一 13 章に、賜物が廃れる時のことが書かれています。「13:10 完全なものが現れたら、部分的なものはすたれるのです。」とあります。この「完全」は、文脈から明らかにキリストの再臨を表しています。ですから、主が既に再臨されたというのでなければ、…もしそう言ったら異端ですが、そうでないかぎり、聖霊の賜物は廃れることなく、異言も、預言も、知識も、人々の徳を高めるために用いられ続けます。

40 ペテロは、ほかにも多くのことばをもって証しをし、「この曲がった時代から救われなさい」と言って、彼らに勧めた。

ペテロはここにおいて、自分の身に起こったことを証したり、また聖書から証したりしたことでしょう。そうしているうちに、この時代がいかに曲がっていたかが見えてきます。イエス様は、「マタ 16:4 悪い、姦淫の時代はしるしを求めます。」と言われました。数多くのしるしが行われたのに、この方をキリストと認めず、不信仰に陥り、自分の心の中の悪を放置しているその時代を、姦淫の時代と呼ばれました。偶像礼拝をしていた、バビロン捕囚前の時代のことと同じようなものと断じたのです。先に、ペテロはヨエルの預言を取り上げました。そこには、天変地異を含む大患難の預言がありました。それが起こるのは、神の怒りが地上に降るからです。地上に罪と不法がはびこっており、罪が天にまで積み上げられているからです。主は忍耐深い方であり、ひとりも滅びず、悔い改めて救われることを願っておられます。しかし、定められた時に地上に苦難をもたらすようにしておられます。その時代から救われなさいと勧めているのです。

そして英語で、ペテロのようなことは「フォローアップ」と言います。信じると表明したばかりの人に、証しをし、勧めをすることです。信仰に留まっているように励ますことです。

41 彼の事ばを受け入れた人々はバプテスマを受けた。その日、三千人ほどが仲間に加えられた。

驚くべことが起こりました。なんと、成年男子の約三千人がペテロの説教によって、バプテスマを受けています。神殿の前には、数多くの浸礼槽がありました。また、神殿の北にはベテスダの池もあります。多くが、それぞれ手伝って、水のバプテスマを受けたことでしょう。そして、「仲間に加えられた」とあります。ここが大事です、弟子たちが 120 名で心一つにして祈っていた時に、すでにそこにはいい意味での仲間意識がありました。共同体がありました。その中に加わったのです。

2B 教会の始まり 42-47

42 彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた。

教会の営み、活動が始まります。ここに教会の四本柱のような項目が書かれています。第一に、

「使徒たちの教えを守」ることです。これはまさに、新約聖書と言ってよいでしょう。使徒たちの教えが編纂されたのが、新約聖書です。そして新約聖書は、旧約聖書に基づいていますから、聖書そのものと言ってよいでしょう。「教え」をしっかりと守っていくということです。イエス様が弟子たちに、「マタ 28:20 わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」と言われていました。パウロがテモテに対して、「I テモ 4:13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。」と言いつけています。ですから、しっかりと一つ一つ、今も「教え」について学び、そしてそれを守るように勧めているのです。

第二に、「**交わり**」です。これは、ギリシア語で「コイノニア」と言いますが、「共有する、分け合う」というような意味合いがあります。そして、自分たちが一つになっていることを体験するのです。一つのを分け合うので、自分のものを自分のものを主張せず、それを主にあって分かち合う時に、互いに一つになることができます。「援助」という言葉にさえ訳されています。「ロマ 15:26 それは、マケドニアとアカイアの人々が、エルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために、喜んで援助をすることにしたからです。」しばしば「交わる」を、自分が何かを受けるといふことに勘違いすることが多いですが、分け与えるということによって自分も受けるのです、これが霊的祝福です。

第三に、「**パンを裂**」くことです。これは、最後の晩餐で、イエス様がパンをご自分のからだとし、ぶどう酒をご自分の流される血とされて、わたしを覚えてこれらのことを行いなさいと命じられたことです。交わりの延長ですが、聖餐は、主のからだと血にあずかることによって、互いが一つであることを表します。これが、礼拝の中心と言ってもよいでしょう。教えと交わりだけでなく、パン裂きもあるのだということを感じたいです。

そして第四に、「**祈り**」であります。使徒の働きを見て行けば分かりますが、彼らがいかに祈りに専念しているかが分かります。すでに 1 章で、心一つにして祈っていた姿があります。使徒たちが捕まった時も、彼らはマルコの家で心一つにして祈っていました。そして、配給について問題が出てきた時に、使徒たちは給仕を行う者たちを七人選び、「6:4 私たちは祈りとみことばの奉仕に専念します。」と言っています。祈りがどれだけ重要視されていたかが分かります。

そして次に、これらの彼らの活動によって何が起こったのか、その実を見ることができます。

⁴³ すべての人に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議としるしが行われていた。

神に対する健全な恐れが出てきました。これは良いことです、聖なる御霊が働かれるところには、神への畏れが生じます。そして使徒たちが、多くの不思議としるしを行いました。神への恐れがあるところで、御霊が自由に力強く、働くことができます。

⁴⁴ 信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、⁴⁵ 財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた。

信者たちは、その交わり、共同体意識がとて強くなり、一切のものを共有するようになりました。ちょっとした共産体制です。これは愛の動機、自発的に行われているので、喜ばしいことですが、しかし、先に言及したように 6 章ではすでに、配給において不平等が起こっているという問題が出てきました。エルサレムの教会が困窮して、パウロなどが他の教会に援助金を募っている姿も出てきます。教会で共産体制を取ることが必ずしも、神の御心ではありません。しかし、愛の動機で分かち合い、一つになっていることを、知恵の中で保っていくことは手本にすべきことです。

⁴⁶ そして、毎日心を一つにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、⁴⁷ 神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。主は毎日、救われる人々を加えて一つにしてくださった。

すばらしいです、ここで強調されているのは、主イエスを信じる仲間として、人々から好意を持たれていたということです。心を一つにして宮に集まって、おそらく祈っていました。それから、家々ではパンを裂いて、共に喜びと真心をもって食事をしました。中東において、集まれば食事をすることは必須です。そして、不平ではなく、感謝や喜び、そして神を賛美している姿が、周囲の人々に好意を持たれました。イエス様が言われた通りですね、「ヨハ 13:35 互いの中に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」

そして、大事なのは、「主は毎日、救われる人々を加えて一つにしてくださった」であります。救うのは誰ですか？主ご自身です。主が、仲間になっている彼らの間で御霊によって働いてくださり、救われる人々を加えて一つにしてくださったのです。私たちが加えるのではないのです。どこに私たちが献身し、心を使えばよいか分かるかと思えます。使徒の教えを固く守り、交わり、パンを裂き、そして祈るのです。そして互いに愛し合う、仕え合うのです。そして自分を聖く保つのです。聖霊がそこで力強く働いてくださいます。